

(開始時刻 12:00)

○荻部部会長 では、早速時間になりましたので、ただいまより「叡智のフロンティア部会」の第2回会合を開催いたします。

本日は委員のうち、原さん、山崎さんのお二方は御都合により欠席となっております。

本日は野田総理が御公務多忙の中、御出席くださいましたので、一言ごあいさつをよろしく願いいたします。

○野田内閣総理大臣 叡智のフロンティア部会の委員に御就任をいただきまして、本当にありがとうございました。感謝申し上げます。

今、政府の中では、社会保障と税の一体改革を推進するべく、全国で説明をしているのですが、一番前提でお話をするのは、人口構成の激変の話です。色々な世代がいると思いますが、基本的には、多くの人が1人の高齢者を支えるという胴上げ型の社会の生まれだと思えます。

しかし、今は3人で1人を支えるという、いわゆる騎馬戦型の社会に突入をいたしました。20年後には、2人が1人を支える社会になります。これからのビジョンを展望する2050年代というのは、1人が1人を支えるような、まさに肩車の社会になります。肩車の社会は大変です。平たく言うと、人口構造がピラミッドの構造から逆ピラミッドの構造に劇的に変化をしていく中で、この日本はどうやって生き残って発展をしていくのかということだと思います。

特に2050年代の1人が1人を支える社会というのは、支えられる側にも支える側にも知恵が必要です。そうしたことをよく展望をしながら、よほどの知恵が出てこない、厳しい世の中になってしまうと思えます。せっかくパックス・パシフィカの時代になろうというときに、だんだん老いていく、衰退をしていく国ではいけないのです。常に独創的な知恵がみなぎって、それが具体化されていく、システムとして具現化されていく。そういう社会を是非描いていただければ、大変ありがたいと思っておりますので、各分野で御活躍の本当にすばらしい皆様にお集まりをいただきました。

是非、荻部部会長、隠岐部会長代理を中心に闊達な御議論をいただいて、すばらしい御提起が出てくることを心から期待を申し上げて、一言ごあいさつに代えたいと思えます。どうぞよろしくお願いいたします。

○荻部部会長 総理、どうもありがとうございました。

○荻部部会長 では、初めに私の方から、前回の部会の意見交換の模様を簡単に御紹介します。

前回、色々な方からごあいさつとともに御意見をいただいたのですが、3点ほどにまとめられると思えます。それぞれが一見対立するように思われるものをどのように組み合わせていったらいいかという話として整理できます。

まず第1点は、グローバルな知や文化とローカルな知や文化の2つをどのように組み合わせるべきかという問題です。いわゆる国際化、グローバル化の状況の中で、

文化交流や人の移動が盛んになり、日本国内だけではなく、アジアや欧米の人々が何を求めているのかということです。何を求めているのかという以前に、そもそも何をいいと思っているのかを意識しない限り、国も社会もやっていけなくなりました。このことは確かです。

しかし、それがグローバルスタンダードに合わせるということで、単にマクドナルドとスターバックスが普及するだけでいいのか。だれもがウィンドウズのパソコンをのぞいているだけでいいのかというと、それはやはり違います。恐らく、そこで日本がこれまで持っていたローカルな文化の持っている潜在力のようなものが発揮できるようにならなければいけません。そんなようなことが課題として、まず第1点浮かび上がったと思います。

第2点として、変化するもの、変化すべきものと、変化しにくいもの、あるいは変化させてはいけない、変えられないもの。その2つをどのように組み合わせるかという問題だと思いました。今、総理のお話になった、これまで予想もつかなかった高齢社会化にも代表されますし、あるいはコンピュータのソフトウェア開発の業界は3年で全く状況が一変してしまうというようなことです。そうした形で予想しなかったスピードで、社会が国際的にも国内的にも変わっていくのに対して、どのように知を新たに再構築していくか。そうした意味での変化に追いつくことを求められることは確かであるわけです。

ただ、反面こういうこともあります。国際宇宙ステーションで働いている人の中で、アジア人は日本人だけだったという話が私には印象的でした。それは恐らく日本の文化、社会が持っている科学技術、新しい技術を開発する一種の潜在的な力の表れとも言えるでしょうし、あるいはそうした技術等の力だけではなく、政治や外交の力や努力の蓄積、恐らくそうしたことに深く関連しています。

つまり、そうした形で一方で新しい変化に対応しながら、しかし、変わらないもの、変えてはいけないもの、例えば前回の会議で御指摘のあった日本語などを大事にし、そして、同時に日本の文化というものに誇りを持ちながら、新しい時代に対応をすることが課題として重要なのだらうと思います。

3番目の問題としては、一種のデータ化できる、あるいは人工知能に転用できるような知と、それになじまない人間的な、身体に組み込まれたような知。データ化できるような知とそれができない、形にならない知をどのように組み合わせるかという問題が大きな課題として出てきていると思います。

これはたまたま今朝の新聞に紹介されていますけれども、福島のある町の町長がまでの村づくりということを言って、ニューヨークで講演されたということが報道されています。地方の伝統的な暮らし方が実は環境に優しい生活として、一種の国際的なモデルになり得るということがあるのだと思います。

今のまでの生活であれば、ごく普通に習慣としてやっていたことを新たに言葉にすることによって、一種の言葉になる情報として発信できる可能性も開けてくる。そのようなところで、身体トレーニングの問題なども恐らく重要な課題として出てくるだらうと思

ます。その上で、更にまた、先ほど言ったデータ化できるコンピュータ、人工知能、そうしたものの組み合わせをどう考えるかということが重要なのだろうと私の方ではとらえました。

以上、乱暴な整理ではありますが、前回の方向としては、以上のようなことです。

次に、部会長代理から、今回初めて御出席ですので、簡単にごあいさつをお願いいたします。

○隠岐部会長代理 広島大学で教鞭をとっております。前回欠席してしまいましたので、このたびは私の方の所感というか抱負というか、そうしたものを簡単に述べさせていただきます。と思っております。

まず、この機会をいただいて思いましたのは、危機と未来の展望ということですが、私も、私は歴史家です。科学史をやっております。それで、これはよい知らせ、吉兆なのではないかと思いました。歴史家は未来予測をしてはいけないのですが、しかし、16世紀の西洋の特に学術の歴史を見ます限り、これはよい組み合わせではないかと思っております。

というのも16世紀からさかのぼって、まず、科学技術が始まった16～17世紀は、やはり宗教戦争がありまして、危機がヨーロッパ中を襲っていましたが、その中でフランシス・ベーコンという人物が科学技術を発展させて、国家がそれを支援するということは重要であるというビジョンを打ち出し学問論をやりました。

それから、18世紀、19世紀と続いても同じようなことがありまして、19世紀を見ましても、ナポレオンに荒らされたドイツの大学が近代大学をつくろうと、新しい大学の学問をつくろうという感覚で盛り上がり、近代的なドイツの諸大学が生まれました。

20世紀になりますと、第二次世界大戦の後で、アメリカは科学技術で新しい世界、新しい社会と科学技術の関係をどうつくっていけばいいのかというビジョンを出している。このような繰り返しのパターンがあり、実際にアメリカは今でも同じようなことを出し続けているのですが、日本も同じようなフェーズに入っているのではないかと、そのようなことを思っております。

以上、時間も迫っておりますので、簡単にごあいさつの代わりに述べさせていただきます。ありがとうございます。

○荻部部会長 どうもありがとうございました。

では、総理は現在、御公務が御多忙中ですので、ここで御退席ということです。どうもありがとうございました。

○野田内閣総理大臣 では、よろしくをお願いいたします。

○荻部部会長 では、御紹介が遅れましたが、本日は古川大臣と石田副大臣にも御出席いただいております。

古川大臣はこの部会には今回初めて御出席ですので、一言ごあいさつをよろしくお願いいたします。

○古川国家戦略担当大臣 国家戦略担当大臣を拝命いたしております古川でございます。

委員の皆様方には、委員に御就任をいただき、また、大変お忙しい中、御出席をいただきまして、ありがとうございます。

私はこれからの社会のキーワードを2つ挙げるとすると、持続可能であることと、共生ということではないかと思っています。これは日本だけではなくて、世界がということですが、日本の歩みを考えますと、まさにその2つを実現してきました。それが日本の文化であり、伝統であり、あるいは強みであったのではないかと思います。

例えていいますと、日本は竹に象徴される、強さもありますがしなやかで、風が吹けば振れますけれども、また元に戻ってくるような、日本はそういうしなやかな強靱な強さというものを持ってきました。多分これが今後とも必要なのではないかと思います。また、それは日本だけではなくて、実は世界にも必要なことではないかと感じています。そういう意味で、このフロンティア分科会では、単に日本の将来だけではなくて、まさに世界が目指すべきビジョンを是非考えていただければと思っています。

フロンティア分科会には、ほかに繁栄と幸福と平和の部会があります。ここにちょうど木の絵がありますが、この叡智の部会はまさにこの木のような、この木の下で繁栄、幸福、平和の各部会の議論が行われるとも言えるかと思っています。その全体にかぶるのがまさに叡智の部会の皆様方の議論ではないかと思っていますので、是非闊達な御議論をいただいて、素晴らしい提案をまとめていただくことを心から期待を申し上げますので、よろしくお願い申し上げます。

○荻部部会長 どうもありがとうございます。

では、本日の進行ですが、本日は4人の委員の方々から、お一人15分ずつ御報告をいただきます。そして、お昼がかかりますので、昼食が用意されているはずですので、その後は10分の休憩を取りまして、勿論、食べるのに時間がかかる方はそのまま食べていただいても結構です。10分経ったら、その4人の方々の御報告について、自由に意見交換、議論をしたいと思います。

御報告の前に、初めて御出席の委員の方がいらっしゃいますので、簡単にごあいさつをよろしくお願いいたします。

○中村委員 よろしくどうぞお願いいたします。

私のバックグラウンドは、メディアのポリシーでございまして、実は30年前はロックバンドをやっていましたが、挫折いたしまして、政府に入りまして、15年ほどIT政策に携わっておりました。それから、MITの客員教授、その後、スタンフォード大学の日本センターの所長を経て、今は慶應義塾大学に身を置いております。

私は今後のフロンティア、人類にとってのフロンティアは、宇宙空間、マイクロ空間、そして、バーチャル空間、色々なものが挙げられると思いますが、その中でもバーチャルな空間、つまりコミュニケーションや表現、創造というところに関心がありまして、そのようなプロジェクトを進めております。新しいメディアを開発したり、子どもの創造力を育成したり、日本のポップカルチャーを海外に展開したりといった、いわばデジタル技術を

使った産学連携のプロジェクトを進めているというのが本業でございまして、その観点から、これも古川大臣の下で政府の知財本部のコンテンツ部会長も務めているというところでございます。

私の活動あるいは考えていることも、いずれ機会があれば、御報告をさせていただきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

○荻部部会長 よろしくお願ひします。

では、報告に移りたいと思いますので、よろしくお願いいたします。お手元の資料1をご覧ください。

○隠岐部会長代理 では、報告を始めさせていただきたいと思います。

先ほども自己紹介を簡単にしましたが、科学技術史、科学技術論を教えております。研究は科学技術の制度・政策史。本当に歴史家として、特に18世紀のフランスの科学アカデミーという制度について、著書を出していたりします。それでサントリー学芸賞などをいただいたわけですが、基本的には、科学技術や学術が社会の中にどのように位置づけられてきたか、特に18世紀というのは、自然科学というものが全く社会に認知されておらず何もなかったところに新しい価値観をつくったというところがありますので、そういったところを細かく見ております。

一方で、社会に向けた活動と申しますか、私はいわゆる博士の就職難、研究者の就職難について、色々と考えて発言したりする機会がありまして、及ばずながら本を出したり、任意団体で活動をしたりしておりました。

現在は日本学術会議で若手アカデミーというものをつくっております、これは若手の研究者が連携して学術の未来を考えていこうという、この部会にも少し近いところのある委員会がございまして。そちらを立ち上げるところから関わっております。

まず、叡智ということで、今日は簡単にお話しさせていただきたいと思います。語源からして言葉を調べてみました。似ているけれども、2つの少し違う意味が主に辞典などで使われているようで、申し上げるまでもないかもしれませんが、1つ目は非常に古い起源を持つ、仏教や東洋哲学に関わるような、真理を洞察する精神能力という意味合いです。もう一つは、これはどちらかというと、合理性とかそちらの方に関わるものです。intelligenceの訳語として用いられたという経緯があるようで、非常に実践的な理論的な知能、知という意味があるようです。

私のポジションですけれども、もともと高等教育・研究問題に関わっていて、歴史家であることは、現代の高等教育の問題と研究の問題に関わっていたので、特に大学院卒の人材の活用に関心が少し偏っておりますので、その観点が強く出た発表になるかと思ひます。

ただ、一方で叡智ということで、文化・芸術に広く関わるものと認識しております。ですので、それを踏まえて、個人としても発言します。つまり、文化・芸術については素人ですが、多少は発言いたします。

この現在の延長線上にある2050年の状況予測は、非常にナイーブなものにとどまってい

ます。データを集めて、きちんとしたことをお話しするということにはあまりなっていない。ただ、心配していることがありましたので、不安を書かせていただきました。

1つは、日本の若手研究者がこのままいくと、今のレベルの規模を維持できるのかという気持ちがあります。例えば9月入学ですとか、一部の授業の英語化といった流れが大学では今ありますが、そうするとアジアからの留学生の受け入れは増えるであろうし、一定の研究水準も維持されていくだろうと思います。特に大学院です。そのようなことがあると思います。

ただ、一方で、日本の国内の若者にとって大学院ということが、とてもリスクの高いものという認識がどのくらい減っているのかというのは、少しわからないという気持ちでいます。

大都市圏の上位大学への人材集中化がないかということも懸念しております。特に今、私は地方におりますけれども、学部を出て、安定した新卒就職をするということが目標になるような傾向があります。40年後ですので、どう変わるかはわかりませんが、このままいくと、格差といったものにつながるのではないのでしょうか。

国際レベルでも、今は非常に英語圏の方を向いていると思いますが、データ化された知識といったものを非常に追い求めていく傾向がこのまま続いていけば、ある種の国際間での序列化というか、分業体制が定着してしまわないか心配しています。

人文社会科学では、これは少しきつい言葉を書きましたが、植民地化という言葉を使ったのは、私の学問の分野に関係があって、もともと日本人は近代科学を入れるときに、あえて自分たちの国を植民化するような、自分たちで自分たちを植民地にする。つまり、ほかの国の知識を入れて、それを植民地にされた地域の人々がやったように受け入れていくということをやったのです。ただ、一つ違うのは、日本語化を徹底した。最初は全部、英語や外国語で知識を入れるのですが、つまり先生はみんな外国人ですが、そのあとを日本人にして、そして、言葉自体も日本語で科学や人文学をやるということにしていった経緯があります。

ただ、現実には、自然科学は今、英語でやらないといけない部分もあるのですが、人文社会科学はそれによって、一つの日本語の人文社会科学というものになったという経緯があります。その傾向がまた元に戻ってしまわないか、ある種のグローバル化によって、日本語による研究活動がやや細っていないかということをお心配しています。予測できていないわけではないので、心配と言った方がいいかもしれません。

文化・芸術については、ここは素人なのでわかりませんが、創造性を評価して投資できる制度がこのままの形できちんとあるのかということをお心配しています。つまり、素晴らしい才能はどこでもいつでも出てくると思いますが、それを評価できるような余裕があるのかということです。

暗い話ばかりでしたが、要は格差というものを私は非常に懸念しております。格差が拡大すると社会が不安定化するというのは、各国の格差と刑務所の収容者の数などの統計

があるので、一応関わりがあるということは前提として考えていいと思います。

今、ざっと話しましたが、根拠は一応あり、時間が迫ってしまうので、ここは簡単にやります。

今までの科学技術政策が得意ではなかった分野があると思います。私は文系に寄っているので、そこからの視点かもしれませんが、科学技術を非常に重視して、そもそもそれによって近代化を果たしたと思います。明治から第二次世界大戦の後も、それによって繁栄を手にしたところはあると思います。

一方で両輪としてあるべき何かが欠けているのではないかという気持ちがあります。特に人文社会科学については気になっています。やはり物を中心に考えているという気持ちがあります。社会の構造的な把握とか、これは社会科学の得意とすることですが、それがうまく生かされてきたのかという疑問を持っています。

2 番目にある「フロンティアをつくることの困難」ですが、これは歴史的に日本があまり得意としてこなかったところだろうと思います。外部から色々といいものを取り入れて、うまく使うというのはとても上手ですけども、気持ちとして発信していくところには、なかなかならなかったであろうと思います。これはあえて申し上げるまでもないので飛ばします。

これも私が関わった例で、ポスドク問題があります。難しいところですが、なぜポスドク問題、つまり、若手科学研究者の就職難といった問題が起きたのか。これは一方では、非常に各国からうらやましがられた政策を取ったのです。産学連携や基礎科学の振興などのため科学にお金を投入しました。その資金を使って、たくさんの大学院生を入れて、学位取得後は任期制の研究員にして、科学研究の底上げを図ったということがあります。

また、大学院の定員を増加させて、それにより高度な技能や知識を持つ人材を増やしていきました。このやり方は、例えばアメリカは、博士学位の所持者を増やしていきましたが、ほかの国も追随して、このように中国などもすごいのですが日本でも緩やかに増加していきました。

その結果、若手の任期制研究員が 30 代半ばになったときに仕事がない、大学の職は増えませんので、あぶれてしまうということが起きました。この画像は私たちが見ていた 5 年くらい前からネット上にあるもので、「博士が 100 人いる村」という寓話があります。この問題の根幹にあるのはギャップです。社会全体の趨勢とのマッチングの問題というか、ギャップが生じていたということです。

つまり日本社会の大半では、終身雇用が基本であり、学部卒者のための社会がつくられています。それに対して新しい仕組みを入れて、うまくかみ合っていないのです。そして、なぜこうなってしまったのかというと、それは社会科学がうまく機能していない、つまり、先ほど、人口構成の話がありましたが、このような仕組みの中でこういう制度があるということを考える時間がなかったからです。また社会の側にも、ライフコースの多様性が想定されてはいなかったわけです。色々なミスマッチの問題があったかと思います。

さて、ここからが本題になります。今の段階で考える理想像を簡単に言葉にしてみました。ここで少し申し上げなければならないのは、私はこれを考える前に非常に「しまった」と思ったことがありまして、ここを出している視点は先ほどあれほど「追い付け追い越せ」がいけないようなことを言っておきながら、実は「足りないものをまず埋めてよ」という要求になっています。

一方で、本当ならやりたかった、やらなければいけないと後で思い付いたのが、40年経つと学問の配置が変わっているという可能性自体を考えに入れることです。今は物理、化学、生物、地学というものである程度ディシプリンがはっきり認識されていますが、一方で新しい分野がどんどん出てきています。40年後に私たちが今、思うような学問の配置があるのかということです。

あとは文化・芸術にしても、今はアニメやゲームなど我々にとっては若者カルチャーですけれども、多分40年後は老人や熟年世代の何かになっていると思います。また、新しいものが出てきているでしょう。そのコンテンツの予測をしたら面白かったと思いながら、全く時間がありませんでした。特に自然科学などは本当に変わるときに変わります。今、予兆があり、大学の制度が変わりつつあるので、ひょっとしたら分野の文系、理系という配分もかなり変わっている可能性があると思っています。それは今回考慮することができていません。

現時点で考えたいのは、この3つです。先ほどの要約にもありましたが、2つの方向を意識しなければいけないのではないかと考えています。

2つのグローバリゼーションという言葉当てました。グローバリゼーションと当てたのがよかったのかは、まだわからないと思います。ただ、これは既に世界で動きがあるのです。よく知られているグローバリゼーションは、いわゆる2000年に入ってからずっとかけ声として聞かれてきたグローバリゼーションです。英語圏が主導してつくっているイメージです。つまり、国際的な知の競争があり、それに勝ち抜いていかなければいけない。ナンバーワンを目指せという方向です。従来型と書きましたが、2050年にはどうなっているのかわかりません。

もう一つ、グローバルで追加しておきたいのは、アジアでもある種の競争というか、知の競争といったものが活発化するのではないかとということです。中国、韓国など、どこまでかはわかりませんが、そういったものがあるだろうと思います。

一方でもう一つ動きがあるのは、国連や UNESCO や、持続可能な発展という形でプロジェクトが色々とありますが、地域のための活動や交流をどれだけやって、その地域に知識、学術が貢献しているかというものも、ある種の競争というに変ですけども、ある地域なり国の学術の価値を考えるための基準になっていくのではないかとということです。

持続可能性やグローバリゼーションと言ったのはなぜかというと、実際に例えば特に途上国や地方の大学、日本などだったら岡山大学などが関わっていますが、地域の課題をどれだけ解決できるかということのある意味で競って、かつ、それによって連携してノウハ

ウを共有して、グローバルな知の交流をつくっていくということが既に行われているからです。それが気になるので、日本も意識していった方がいいということです。

同時に地域のための、ということで、環境問題や都市の問題、教育問題、貧困問題という困難をどううまく解決し、持続可能性に向けていくかという話になっていますが、一方で文化コンテンツなどの価値を発信するといった方面も、そちらの視点につなげていけるのではないかと思います。芸術活動、東アジアの歴史や郷土史、またサブカルチャーをきちんと発信する。たとえば「までいライフ」のようなものを発信する。そういったものもある種のグローバリゼーションとして、ローカルから発信していくということを重視していけたらと思います。そういう未来がいいと思っています。

特にオンリーワンをつくるというか、オンリーワンを大事にして、更にそれを言葉にして、外に出していくという方向の学術の政策がある世界だと思っています。

次に、これは簡単な話ですが、教育保障という概念が教育学などで出てきていまして、教育が食物や身体の安全と同様に社会の中で尊厳を持って生きるために必要な資源として認識されていくべきであると、そういう未来であってほしいと思っています。これは平和や幸福の部会とも関わることだと思いますが、国家の役割というものの中に、教育をどう保障するかということが位置づけられているといいということです。

ここから下はお金の問題が関わってくるので、非常に簡単にしか申し上げられませんが、1つは教育の無償化や義務教育の延長といったことも考えられている未来であった方がいいのではないかと思います。高校をどうするかとか、そういったことも含めて、考えられるべきではないかと思います。

国と地方の役割再分配といったことも恐らく議論をしていくべきだろうと思います。これに関しては、私はあまり詳しくないところもあるので踏み込みませんが、言語の問題で少し言いたいことがあります。英語ばかりをみんな学ぶという印象があります。私はフランス留学経験者で、いわば、フランスの中華思想に毒されている人間ですけれども、一方でフランスというのはもう一つの西洋というか、西洋にも複数あるということを見るいい基準となる土地でもあります。

そして、これからはアジアの時代になりますので、どう考えても多言語教育が必要です。色々な言葉を知っている人間を育てるということです。それがあある種の教育保障の一部として考えられていくといいのではないかと思います。

もう一つ、私にとってフロンティアと思われるのが、社会的排除というものについて、学術の視点から考えることが十分にできるようになってほしいということです。長い文章で非常にあやふやなこともいっぱい書きましたけれども、とにかく社会的排除というのは、社会の中で少数派になっていて、色々な資源にアクセスできない状況にいる人々が生じているという話です。

例えばジェンダーの問題や高齢者の問題、精神障がい者、身体障がい者、性的少数者など。この性的少数者について補足すると、例えば婚姻制度が彼らにとっては開かれていな

い。そうすると社会保障の問題にもつながって来たりします。社会の中の様々な少数者の問題は今、日本にはたくさんあります。そして、OECD 諸国の中でも決して人権の状況がいいというわけではありません。その問題について考えることが、ある種のフロンティアになるのではないかと、つまり、社会科学的な、または人文科学的な形でそれらの問題にアプローチをすることで文化的な豊かさがもたらされるのではないかと考えています。

特に社会的弱者について、精神論ではない、すなわち、単に頑張れという言い方ではないアドバイスをできるような社会になってほしいと思います。こちらの場合は時間の問題があるので簡単に紹介しますが、男性同性愛者の自殺念慮についてのグラフです。自殺を考えたことがあるという人は6割くらいいる。こういう調査があるのはすばらしいのですが、この資料では主に HIV の対策の一環としてだけ調査されている。そのような機会があると調査をするけれども、ない場合は特に関わらないという形だと思います。勿論色々な取組みがありますけれども、特に大学では結構色々ありますが、それが例えば自治体だとかにつながっていく仕組みは、今は弱いと感じています。その辺のこともクリアされてほしいと思います。

そのようなわけで、早口で済みませんが、叡智のフロンティアを考えるときに、このような形で考えました。ありきたりなものも多いですけども、地域密着型、オンリーワン型の研究を真剣に考えていくということ、そして社会的排除の問題について投資をする、考えるということが大事であり、「生きづらさ」というものが、ある種の学術的な課題になるのではないかと考えています。

そして、最後にこれも当然ですけども、日本発文化の奨励・普及。これは日本発ということで、日本語圏という言い方をしてもいいかもしれませんが、日本人だからとか国籍というよりも、日本のことをやっている人を仲間として考えていく。フランスにはフランス語話者という意味の francophone という言い方があって、フランス語をしゃべる人はみんな仲間というイメージがあるのですが、それと似たようなある種の普遍的なものとして、日本語の文化を考えていけたらと思っています。

そして、将来はこの三つのような原則で日本の社会があればいいと思います。1つは価値の創造をしていこうという積極的な姿勢です。特にランキングにあまり頼らない、外から与えられるランキングのために頑張るのではなくて、自分たちでつくっていくくらいの感覚でやれるような社会になってほしいと思います。

2つ目は、科学技術史の色々な事例を見ていて思うのですが、競争をあおるのはいいのですが、適正な競争の規模というのをだれか考えていた方がいいのではないかと考えています。これは経済学の方の人とはぶつかる意見かもしれませんが、学術が生産的であるという幾つかの事例を見たときに、競争は一定規模の範囲内だと思います。何倍かとか、そういう数字では出せませんが、やはり過剰な競争はむしろ学術や文化を細らせる要因であるような気がします。競争規模の調整については公的な社会や国家の役割があるかと思っています。

そして、最後は多様性への配慮。これは先ほどの社会的排除の問題です。経済格差、人種偏見、性差別、性指向差別、年齢差別などが、とにかく少ない社会をつくっていくという傾向が打ち出されていればいいかと思います。叡智というのは、そのためにあると考えています。

現時点でしていく必要があると思われるものについて。ここからはかなり政治的主張です。まずは国家と民間の役割の再確認をこれからやっていくべきではないか。国家には基本的に長いスパン、永続的な、50～100年単位のを担っていただきたい。そして、民間には5～10年の仕事を割り振っていくということで、何か考えていけたらいいのではないかと考えています。

2番目、これは本当に真剣に思うのですが、学術と芸術が報われない仕事にならないような制度をつくっていったらいいと思うし、そのための考え方を持っていたらと思っています。これは思い付きで言っていますが、例えば同一待遇、同一賃金の実現をする。特に学術機関です。今、非常勤講師と常勤の教員の格差がすごいです。

次は少し抵抗感を感じる方もいらっしゃるかもしれませんが、「男性稼ぎ手モデル」、すなわち男性が一家の稼ぎ手として2人か3人分の給料をもらうというモデルから解放された方がいい。この件に関しては、例えば私自身の給料が下がることも覚悟しています。私は今、男性が家庭を支えるというモデルでもらえる給料をもらっているという認識があります。つまり、多くもらい過ぎている気がします。

研究者、芸術家のミニマムな社会保障も必要と考えます。どの職種を含めるか、定義は難しいのですが、例えば仕事がないときに簡単にある種の給付を受けられるとか、または税金の問題とか、私は詳しくありませんが、そういったものがあるといいのではないかと。そうしないと、例えば漫画家やサブカルチャーの業界などでは、今かなり使い捨てられている気持ちが蔓延しているように感じることもありまして、やや心配です。

最後に、ここは簡単に触れますけれども、産官学のセクターの相互流動性を高めるといいのではないかと。特に学のセクターに色々な人材がいて、それがうまく社会の中に活かされていないという気持ちを、私の観点からは持っています。この辺はあえて私が申し上げるまでもないことが入りますので、少し省略させていただきます。

以上、皆様と議論をしていく中で、新しい視点やアイデアがいただければと思っています。この写真はかなり趣味に走っていますが、フランスでの日本アニメのイベントの写真と日本の日本アニメのイベントの写真です。同じある種の文化で、つながれている場面かなと思って持ってきました。

このような形で、日本というのは国内だけにあるわけでもないし、または日本の中にもいろいろな異文化というものがあると思います。それらの両方を考えながら、包含していけるような多元的な社会をつくっていければと、そのような夢を持ちました。

どうも御清聴ありがとうございました。

○荻部部会長 どうもありがとうございます。

では、続きまして、よろしくお願いします。

○金森委員　よろしくお願いします。私はこのような場所でプレゼンテーションをすることに慣れていませんので、今日のために書いてきた原稿を読む形で進めさせていただきたいと思います。

このたび、私の考えを皆様にお話しする機会をいただきましたが、私がいかなる話をすることが本部会の趣旨に沿うことなのか悩みました。しかし、私は現代社会を生きる一舞踊家として、身体芸術並びその文化がある閉ざされた趣味の世界から広く社会へと開かれ、国際社会における日本の新たな力となることを信じ、専門性の追求とは普遍性の会得であるという自らの信念に基づき、皆様の専門分野と私の専門分野との関係性をお話しさせていただければと思います。

言語教育は身体教育。私は英語とフランス語を生活に不自由しない程度には話せますが、それは身振り手振りを始めとする身体表現を通して学んできたものです。まずは指先一つで、これが欲しい、いや、ここに行きたい、などのコミュニケーションをとる。そのときに相手が発する声を純粋に音として記憶していくわけです。そして、それを繰り返しているうちに、ある特定の状況下において発せられる音の中に、そのものを言語化したものが潜んでいることを理解していくわけです。そして、唇や舌の形、発音の強弱、呼吸法など、自らの身体感覚を駆使して、そのときに耳にした音を自ら発することができるように訓練していくのです。それはだれもが赤子のときに体験する言語習得体験そのものであり、それは身体経験なのです。

舞踊や音楽は言語を要さない身体芸術です。そして、言語芸術とされている演劇に関しても、戯曲という文学的芸術性だけではなく、実演芸術という意味では、言葉を発する身体表現であり、紛れもない身体芸術です。セリフそのものよりも、そのセリフを語る身体の在りようによって、言葉の意味が変容すること。あるいは役者の身体的集中の度合いによって、空間の意味すらも変容することが、優れた俳優、演出家の仕事を見ればわかります。それは優れた政治家あるいは企業家の演説にも顕著なことであり、舞台芸術の分野に限られたことではないでしょう。ですから、言語教育にも筆記や読解といった国語教育とは別に、身体表現としての教育が必要であり、言語教育とは身体教育でもあると私は考えています。

次に、アジア文化との交流に関して。日本の伝統芸能にはアジア文化の影響が強く、元をたどればつながっている文化であるからこそ、単なる異文化交流ではなく、連携した文化の発展が可能であると思っています。演劇界においては、日本を代表する演出家の方が日本、韓国、中国の3か国の俳優による3か国語同時上演などもされています。そして、歌舞伎界でも女形を代表する方が、中国の伝統芸能である昆劇を上演されたりしています。

しかし、アジア文化との交流において重要なことは、元をたどれば同じということではなく、同じ源泉でありながら、独自の専門的技術を確立しているかどうかということなのです。自らの体と向き合い、専門的技術並びにその身体論を養うことは、自国の歴史文化

に対する敬意を抱かせてくれます。なぜなら、自らの体と向き合うということは、生まれ育った自国の文化と向き合うということなのです。そして、それは何百年も続く歴史の上に自らがあるという自明のことを改めて認識するということです。

一昨年、私の舞踊団は台湾公演を行いました。そして、今年、私の舞踊団の研修生グループに台湾人の舞踊家が5人オーディションに来ます。以前には韓国人の舞踊家がいたこともありますが、彼らは研修生ですから給料は支払われません。ですから、彼らはプロとして踊りに来るのではなく、舞踊を学びに来るのです。彼らの母国台湾にもプロの舞踊団は存在します。そして、彼らは台北にある国立芸術大学の生徒ですから、舞踊の専門的教育を受けています。それが日本の大学で学べるような舞踊教育よりもしっかりとした教育であることは、彼らの身体、そして、踊りを見ればわかることです。

しかし、それでもなぜ彼らが日本へ、しかも新潟へ移り住み、舞踊の修練をしたいかと言ったら、そこには我々の舞踊団でしか学ぶことのできない、我々の専門的技術があるからです。異国と連携した文化の発展には、自国文化の専門的 pursuit、それを可能にする土壌の成熟が必要不可欠です。そして、成熟した自国文化を持つことによって、初めて我々は異国文化に迎合するのではなく、異国文化に対して敬意を抱き、ともに発展していくことが可能になるのだと、私は考えています。

次に、IT 社会と身体文化。現代社会における生活の IT 化、すなわち生活における情報技術の利用度は加速的に進み、日本でも今後、更にその研究及び普及が進められると思います。情報技術とは、身体的機能を体外において拡張するために開発された技術であると言えます。見ること、聞くこと、話すことのような身体機能にあるデバイス、すなわち、装置によって拡張すること。あるいは計算し、覚え、編集するなど、脳の機能を拡張し、人の手を借りずとも自ら思考する人工知能を開発するようなこと。それらは総じて、身体あるいは脳が、我々にとっては無意識的に処理する情報を意識的に再構築することであると言えます。

ここで私にとって興味深いのは、動作の意識化及び意識の再構成とは、私が携わる身体表現における専門的技術そのものであるということです。動くこと、語ること、あるいはそこにあるという存在の仕方までをも意識化し、自らの身体を感情と切り離して客体化すること。これは舞台という非日常的空間を生きる身体にとって必要な専門的技術なのです。

最新の情報技術においては、5つある人間の感覚を拡張することを超えて、体外で拡張された諸感覚を新たな感覚、すなわち第六の感覚として身体に連携させていくことが研究されています。その目標は人間が身体動作をすべて体外装置に委ね、身体感覚を失っていくことではなく、生きた身体そのものが第六の感覚技術によって拡張されていくことだと言います。言い換えるならば、それは現実世界から仮想世界へ逃避していくような、非身体化した社会ではなく、仮想世界を現実世界へと導き、身体的に活用していくような新たな現実世界を創造していくことだと思っています。21 世紀、身体文化に携わる専門家は、その新たな現実世界について考察する必要があると私は考えています。

次に、経済と芸術文化。私が新潟市民芸術文化会館に舞踊団を設けたとき、私が新潟市に提案したのは、舞踊団設立のために特別予算を組むことではなく、既に毎年消費されている事業予算の使い方を変更することでした。それは東京から公演を買う、あるいは自主制作の公演であるにもかかわらず、劇場内での人材では舞台芸術が制作できないがゆえに、東京から人材を招聘するために使っていた事業予算を、新潟市民となり、劇場で専門的活動をする舞踊家たちのために使いましょう、ということでした。

新潟市民となる我々が新潟の劇場でつくった舞台作品を国内や世界に発信し、その専門的活動を通して養われた専門的知識を新潟市の学校教育や市民生活に活用していくこと。それは文化予算の使い方を事業ごとの採算型から人材育成のための投資型に変更しようということです。私の舞踊団はこの5年間で、8か国10都市で公演をしてきましたが、それらはすべて招聘公演、すなわち渡航費や滞在費はすべてツアー先が負担し、なおかつ公演料をいただいて公演をしてきたということです。勿論、国際交流基金などから交流事業に対する助成金をいただくこともありますし、事業費を持ち出してでも行うべき交流事業はあるでしょう。しかし、専門的活動が保障された専門家による舞台芸術が、その公演活動を行うためにも事業費を持ち出さなければ成立しないのであれば、それは投資型ではなく、採算型でもない、単なる消費型なのです。

我々はこの4月、アメリカのワシントンにあるケネディアートセンターから2度目の招聘を受けて公演をしに行きます。そして、5月には昨年夏にサイトウ・キネン・フェスティバルにおいて創作した舞台をイタリアのフィレンツェにある歌劇場で公演しに行きます。そうして我々は活動資金並びに舞台制作資金を舞台芸術の輸出によって回収し、新潟市の名を芸術文化の創造性とともに発信し、新潟市の投資に対するリターンを立証しているのです。そして、何より、その活動を通して、新潟市民の中から国際的に活躍する舞台芸術の専門家を育成しているのです。

21世紀現在、経済状況がひっ迫する中、芸術文化関係者は、文化は金がかかるものという行政の意識に甘え続け、自らの首を絞めていくことをやめ、自らの専門性を、その商品的価値と照らし合わせて判断し、投資に値する専門性を立証していかなければならないと私は考えています。

次に、芸術創造と社会問題。私が現在創作している舞踊作品は水問題をテーマに掲げています。それは3.11震災並びに原発問題を水の惑星に住む生き物でありながら、水の存在を軽視してきた現代社会に対する警鐘であるにとらえたからです。現在の地球にはおよそ14億立方キロメートルの水が存在しています。しかし、人類が直接摂取できる水は14億立方キロメートルのうちの0.01%にすぎないのです。それはこの500mLのペットボトルを地球上に存在する水の量だとすると、人間が摂取可能な水は目薬1滴分にすぎないということなのです。

国連によれば、世界の31か国は現在、水ストレス状態にあるといえます。そして、2025年までに世界総人口の3分の2は深刻な水不足状態に置かれ、3分の1は極限的な水飢鬼

の生活を強いられると予測されています。水の問題は 2025 年に向けた人類の課題であり、この問題に対する取り組みでリードをした国が、福祉、経済、科学、さまざまな分野において、21 世紀をリードする国になるであろうことは、だれの目にも明らかなことです。四方を海に囲まれ、豊かな自然環境を有する日本にとって、21 世紀のフロンティアは水問題の解決とともにあるのではないかと私は考え、この時代を生きる演出振付家として、次回作のテーマに掲げたのであります。

最後に、本部会の議事録公開に関して、この場で個人的な意見を述べさせていただきたいと思います。私はある事柄の情報公開を求める現代人の姿勢に、事象の本質を知りたいという探究心よりも、ある種の物欲的な情報欲を感じます。それは情報化、すなわち文章化された専門知識を読むことにより、そのことを知り得たと思ひ込む危険性とともに、専門性の軽視につながると思っています。専門家の「知らなかった」が通用する社会は、非専門家の「知っているつもり」を助長するだけです。ここで、秘すれば花なりと申し上げれば、四方からおしかりを受けそうですが、昨今の秘なき世の中に違和感を覚える舞踊家のたわごととお許しください。

叡智とは、方法論や技術形態そのものであり、それによって導き出される答えは単なる情報にすぎません。昨今、流行の名言集なるものは、本来その原本から自らの名言を見つけ出す、その読解力にこそ意味があるのだと思います。20 世紀は破壊の世紀でした。21 世紀は選択の世紀だと思います。あふれる情報社会において、何を信じ、何を選択するか。歴史から何を学び、何を残していくべきなのか。そして、いかなる未来を選択し、創造していくべきなのか。

それらを自らの専門的活動を通して、社会に提示していくことが専門家の努めであり、私は身体芸術に携わる専門家として、この選択の世紀を生き抜く知恵が、我々のこの身体に秘されているのだということを皆様にお伝えして、プレゼンテーションを終えたいと思います。貴重なお時間をいただき、ありがとうございました。

○荻部部会長 どうもありがとうございました。

では、続いてよろしくお願いします。

○坂田委員 よろしくお願ひいたします。

私は、博士は工学ですがけれども、それまではずっと経済学でございましたので、基本的には文系寄りの人間だと思います。最初に理系的な知識と文系的な知識の御議論もありましたけれども、一応両方をやってきた人間として、そういう面も含めて、お話をしたいと思います。また、各委員からこれまで発表されたことと、これからお話しすることについて、キーワードも含め、結構かぶるところがあるかと思っています。

時間が短いので、まず、要旨を見ていただいて、その中で各論の文脈を御理解いただければと思います。

私は我が国の未来にとって、我々が育んできた知識、これはそこにありますように、色々なものを含みますけれども、それを社会、市場、世界またはアジアへとより強くつなげ、

新たな社会、市場モデルを生み出すような活動が重要であると考えています。そのことは翻って、社会の課題解決を通じて幸福に、新市場の開拓を通じて繁栄に、世界における存在感を増すことによって平和に貢献をすると考えます。

ここで言うキーワードのつながりの強化ということですが、そういうことが仮に実現をすれば、新しい知の開拓に対して、資金、人材、社会の関心といったものが自然な形で流れ込むことになります。現在は足りないところに政府が無理をして流し込んでいるわけですが、それは色々な形で歪みを生みます。私は自然な形でそれらが流れ込むという好ましい循環をつくり出すことが重要だと考えております。

我々が議論の対象としている知識について、これを森に例えておりますけれども、その中においては幾つかの構造変化が起こっています。同時に知識を利用して、よりよくしたいと考える対象の社会についても、その姿が複雑化し、それらが変化するスピードも加速をしている。

ごあいさつで申し上げましたが、両者を結び付ける活動、つなげる活動というのは、前世紀に比べて格段に難しくなっていると我々は認識すべきだと思います。前世紀にできたからといって、今できるというものではない。

両者を結び付けるためには、社会システムの創造の加速、課題解決や市場開拓を構想し、それにチャレンジする人材の育成、知識を構造化し、人間の判断を支援するような新しい手法の導入、アジアとの水平的な協力といったものが重要だと考えております。

また、私は荒川区で地域の活動にも取り組んでいるのですが、社会の最も基盤的なベースとして、子どもの貧困の問題とか教育格差の縮小とか、こういったものが重要だと考えております。

本部会は未来社会を構想するというのが基本だと思いますので、そこから各論に入らせていただきます。私どもの未来社会というのは、我々が現在持っている知識によって実現可能な領域と、社会が選択する未来社会のあるべきモデルの交点の中に選択肢があると考えています。ただし、この上の2つの間には、濃密な相互作用がございます。そうしますと、我々の将来像というのは、もしくは将来像が描ける範囲というのは、両者の相互作用の中で常に変化をしていくと。知識も変わりますし、社会の選択も変わっていきます。

しかし、両者の間に相互作用がありますので、我々は動いていくターゲットを目指して、今、構想を進めているということになります。多くの知識が十分に活用されず、埋没してしまっていることが問題です。未来社会を開拓していく上で、勿論、知を創造し続けることも重要ですが、加えて、情報工学の手法を用いることで、急速に成長しつつある知識の森の構造、植生、成長度といったものを把握し、それを社会や市場とより効果的に、よりスムーズにつなぐといった仕組みが必要だと思います。先ほどの身体能力、身体運動、身体教育という問題がございますけれども、そういったものに代表される暗黙知についても、言語化し、または可視化することによって、同じ知識の仲間に入れることは可能だと思っております。

知に関して注目する3つの構造変化ですが、詳しく申し上げる時間はございませんけれども、1つは知識の爆発。例えば光触媒ですが、2000年でも年間約500本、現在は年間約4,000本の論文が出ております。2000年時点では500しかなかったため、よほど勤勉な方であれば全部読めたと思いますが、今はとても不可能な状態にあります。この状況は、他の重要技術、例えば、太陽光、燃料電池等でも同じです。

帯を見ていただきますと、知の世界において、中国が相当存在感を増してきていることがわかります。爆発の中で、アジアが知識の拡大の原動力になりつつあるということが見て取れるかと思います。

2番目が知識の再分化です。大学で研究をやられている方は非常によくわかると思いますが、研究の対象とする 이슈がどんどん細分化されています。そのこと自体は、知を深めるためには、私は不可欠なことだと思います。一方で、細分化されることによって、知識を統合することが各段に難しくなりつつあると思います。

3番目が、知識と出口との関係の複雑化・変化であります。

例えば図に示したものは、化学工学に所属している研究者の論文を東京大学のチームで分析をしたものです。どういう論文を書いているかということで、手法の説明は省きますけれども、引用関係を中心に知識をグループ化したものです。1990年までのトータルで見ますと、界面反応とか触媒とか熱力学とか、「化学工学はこんなものだよ」という領域において、研究者の方々が活動しておられたといえます。

一方で、これについて同じ方法で最近2年分だけを取ってみると、例えばグラフェンやバイオセンサーや重金属吸着や有機太陽電池は、1990年時点では、ほとんど想定されなかった領域に化学工学の知識をもって挑まれているというのが普通になっております。1990年の時点では、こういった状況は恐らく予測できなかったと思いますが、知識の基盤はこういう性格のものであって、我々はある知識が10年後、20年後にどういう形で発展していくかというのを簡単に予測できないということを示している例かと思います。

そういったことの結果として、我々が知識に関して直面している問題は、多くの知識が埋没するということです。「埋没知」と呼んでいます。よく明文化された知識と暗黙知という言葉が使われますが、知識が爆発していますので、私はその区分よりも、多くの知識は実は埋没していて、仮に書面に書いてあっても、多くのものがほとんどの人は認識し得ないという問題の方が大きくなっていると思います。

2番目が、難しくなる多数の知の統合。先ほど申し上げました。

3番目が、両者によって深まる知識と社会や市場との間の谷間であります。

そういった問題を咀嚼しますと、我々が抱える課題として、3つに整理できるかと思います。

1つは、知識の閉塞感。多くの知識が社会、市場、世界へと結び付くことができずに、閉塞化している。それが実は科学技術投資への、もしくは文化投資への認識が低いということにもつながっているかと思います。

2 番目が、知識と社会や市場との循環であります。これは、よく大学の知識に関しては、資金の問題が「死の谷」を作り出すということがいわれますが、私はそれだけでは決してないと考えます。特に、制度（安全基準、標準、測定法など）の創造の遅れが谷を作りだしている。私はこれを「第二の死の谷」と呼んでいます。

3 番目は、実は国連、世銀が『East Asian Miracle』という本を 90 年ごろに出して結構話題になったのですが、アジアにおいて第二の奇跡が起こっていて、知識に関しても、アジアの非常に急速な進歩が今、見られる。一方で、そういった中で日本に対して、アジアが遠心力を働かせつつあるということに対して、危機感を感じております。

例えば図が太陽電池に関して、共著関係をもとに国際協力のネットワークを書いたものですが、中国とアメリカ、ヨーロッパとの青い線の太さを見ていただきますと、結び付きがだいぶ太くなってきているということが見て取れるかと思います。数字で見ますと、アジア内での連携よりも、アジア、ヨーロッパ、アメリカとの連携の方が、これは論文の共著ではかっていますけれども、共著の方がいまや多くなっていて、特にアジア・ヨーロッパは、この分野ではアジア内の共著に比べ約 2 倍の共著が行われるという遠心力がかなり顕在化してきているかと思います。

駆け足で恐縮ですが、提言へと進みます。提言 1 は、今のストーリーからおわかりいただけたと思いますが、1 つは知識を社会へとつなげるということです。このためには人材、方法論、社会実験の 3 点セットが必要だと思っています。

1 点目は、これまで大学がこういう人材の教育にやや力をそそぎ足りなかったのではないかと思います。俯瞰的な知識をベースに、文系、理系ということのこだわり自体、私はこれからの課題解決のためには捨てるべきだと思いますが、そういったこだわりのない知識をベースに課題解決を構想し、技術や知識の不確実性を管理し、それが社会の合意形成にとって前提になるわけですが、そういった能力、社会の合意形成を具体的に先導できるような力。こういった力を持つリーダー、もしくはリーダー候補の養成が必要だと思います。

2 番目が、膨大な知識と社会をつなぐ 21 世紀型の手法の導入。私は、これを「俯瞰工学」と呼んでいます。情報工学、ウェブ工学の手法を用いることにより、人間の思考や意思決定を効果的に支援することが可能となります。

3 番目が、現在行われているような社会実験よりも、ずっと大きな大胆な社会実験が私は必要だと思います。例えば自転車シェアリングというのは、日本でも地域では色々行なわれているのですが、非常に規模が小さい。パリに行かれるとすぐにわかるのですが、パリは瞬く間に町中に自転車シェアリングが普及しました。シェアリングは広く普及しないと、その効果、利便性が本来は評価できないはずであって、我々が先に進もうと考えれば、まずはもっと大胆に実験をすべきだと思います。

総理も高齢者社会の問題をおっしゃいましたが、我々が解決すべき課題の最重要ポイントは高齢化社会だと思います。世界的には、これは片仮名で書いているのは日本語を軽視

しているわけではなくて、日本には適切な概念がないからですけれども、ジェロントロジーという概念がございます。図は、この領域においてどんな知識領域があるかを私どものグループで構造化したのですが、我々は相当膨大な知識を実は社会は既に持っていることが示されています。こういった知識によって、我々は次の世代によりよい社会をつくり得る可能性があると思っております。

これは知識と社会課題とをつなげてみたものです。例えば高齢化社会の問題。これは社会課題の知ですので、かなり文系的な知識が混じります。それとロボットの知識の間の関係を見てみたのですが、詳細は説明できませんけれども、1つは先端の医療、手術、高齢者の身体機能の補完、高齢者の癒しという意味でペットとあります。それから、高齢者に関するトラッキング。技術やアイデアを、こういったような課題解決につなげることが可能だというパスが描かれています。

ただ、先ほど申し上げたように、こういったものはどの分野でも自明ということではないので、こういったものを知り得る活動について、もっと大きな注力がないと、知が閉塞し、よりよき高齢化社会は生まれないと私は考えます。

2番目が、知を市場へとつなぐということです。これに関しては、制度創造、新技術等に対応した社会インフラ、市場と知識社会をつなぐ機能、クリエイティブな地域コミュニティの形成。こういったものが必要だと思います。

1点だけ触れますと、制度創造です。私は、「法律・制度時間と知識時間の溝」という言葉を使っているのですが、知識は先ほど申し上げたように、非常に激しく変化・進歩しています。一方で、法律や制度は変化が緩慢であると言わざるを得ないと思います。そういった溝の間で、知識が研究室にたまってしまっている。もしくは企業の中にたまってしまっている。文化活動を行われる方々の間にとどまってしまっている。制度上の想定外があると、実は知識や技術は飛び出していくことができません。この問題は最も大きい問題だと考えます。

もし、うまくそういったものの橋渡しができれば、実は知識も大きく飛躍する。これはアメリカにおける3つの電池、サステナビリティ観点の技術の例ですが、社会の関心が技術と結び付いた途端、爆発的に特許の数が増えていることがわかります。

3番目が、知を世界、アジアへとつなぐという問題です。これに関しては、私は日米をやはり基軸としながら、アジアと水平的に協力する。そういった活動が必要だと考えています。これまで多くの活動は、ODAのときのイナーシャが残っていて、垂直的な協力の発想が多いと言わざるを得なかったと思いますが、私は、今後はもっと水平的な協力の関係が必要だと考えております。

4番目は、21世紀型の知を生かす手法を導入するということで、先ほど少しお話をいただきましたけれども、人間の知的な能力と貴重な時間をよりそれが必要とされることに集中的に投じることができるようにするために、コンピュータベースのアプローチを生かしていく必要が不可欠だと考えております。

また、そういったもののために、ネットワーク・オブ・ネットワークスと言っていますが、それでも、そういった領域や地域を超えて協力するコミュニティの形成が必要だと考えております。

5 番目に、未来を開拓する人材の育成ということで、高校生、大学生、専門家教育、リーダーの育成、それぞれにおいて未来社会を念頭に置いた教育の充実が最も重要だと考えています。例えば出る杭を伸ばすような試みは必須だと考えます。

例えば図は、アメリカにおいて、情報系の修士を卒業した学生の数ですが、アメリカにおいてはマイクロソフトやグーグルが起業して成長するよりもかなり前から、そのために必要な人材を生み出していたことがわかります。

最後に、立脚すべき基本原則について、非常に初歩的な考えを申し上げます。

1 つ目は、年齢、性別、国籍を問わない、開放的な社会の創造を挙げたいと思います。学術の世界でも、既に国際的な学会や論文誌では、そういったものを全く問わずに、自分たちのコミュニティの招き入れようという活動が一般化しております。残念ながら、日本の学会においては、そういうものが足りないと思います。

そのための技術として、松尾先生が御専門のウェブの技術はふんだんに使われております。それによって、どんどん仲間が広がっていく。それによって公平な立場で優秀な方がコミュニティに招き入れられるという姿が見られると思います。

そういったものは学術の世界だけではなくて、各分野において必要であるし、既に起きていること、実現可能なことだと考えます。

2 番目は、若い力の解放です。先ほど大学院のポスドク問題についてお話がありましたが、私も全くそうだと思います。ポスドクもしくは特任制度を入れたのはいいのですが、正規ポストを持ってない若手の方が非常に多くなっています。東京大学でも特に 30 代の多くがそうです。

そういった状況だと、勿論トレーニングの期間としてはある程度必要ですが、色々な知的な活動においては制約が大きい、無駄なことに時間を費やさなければいけない。そういったことはある程度、その制約を開放して、若い力を開放する必要があると考えます。

3 番目に、日本の持つよさとして、協調性や公共精神の高い社会の維持を挙げます。

私はこの夏、荒川区で節電活動に携わっていたのですが、その際、「節電マイレージ」というアイデアを導入しました。20%以上節電した家庭については、ごくささやかな記念品を差し上げるということをしておりました。これは夏場の間、延べ 5,000 軒以上の家庭が参加されました。タイに行って話しますと、タイではこんなことは起こり得ないと。日本社会はすごいという御評価をいただきました。こういう社会は何とか維持したいと考えます。

時間がなくなりましたが、他の部会との活動につきましては、最初に申し上げたような点で、本部会の議論はつながりが幾つものパスがあるかと考えます。

時間ですので、以上で終わらせていただきます。

○荊部部会長 どうもありがとうございます。

では、よろしくお願いします。

○黛委員 よろしくをお願いします。

私は研究者ではないので、今日発表することは体系的ではないですし、断片的で全体を網羅した話ではありませんけれども、あくまでも自分の領域で考えたことを意見として述べさせていただきたいと思います。

最初に、叡智とは何かということをもう一度改めて、自分なりに考えてみました。やはり環境とか状況がどのように変化しても、私たちが常に的確に対応できるようにせしめるもの。それが叡智だと思います。そう考えると、叡智というのは、知恵とか経験とか、そういう日ごろの集積、積み重ねの中にある、すなわち文化力であると思います。ですから、期限付きのものではないと思います。

一方で、もうたびたびこの部会でも話題になっていますけれども、グローバリゼーションがあります。グローバル化は有史以来、ずっとこれは続いてきたことで、いわば人間のさがとして、これからもどんどん進んでいくのでしょう。グローバル化が進むということを前提として考えてみたいと思います。グローバル化が進むと、貨幣経済化、画一化、均質化、都市化、個化、といったものをもたらし、伴っていく。その結果、日々の積み重ねに対して、マイナスに働いていくことが多く、文化力を低めることになっていくように私は思います。

グローバル化を否定しているわけではなくて、グローバル化のはらんでいる負の面を幾つか挙げてみたいと思います。都会では、今、人と人の関係がとても希薄になっていると思います。そして、もののみならず、福祉も教育も環境も治安も色々なことが金銭で、キャッシュで解決されていると思います。その結果、日本人の生活力、一人ひとりの生きる力はととても低下しているように思います。特に都会の人ですね。この傾向が加速されれば、ますます危機に弱くて、脆弱な国、日本人になっていくのではないかと思います。

震災が起こった後にスーパーの買い占めが随分問題になりましたけれども、あれもその顕著な表れだと思うのですが、すべてのものが正常に機能していてこそその生活で、それが途絶えてしまうと一人ひとりにそれを克服する力がない。逆に、地方にはそういう力がまだ残っていると思います。私は震災の後に岩手県葛巻町というところに行って、全く普通の御婦人から言われた言葉で、とてもショックを受けました。「都会では物の買い占めがすごかったそうですね。うちの町では一切そういうことはなかった。スーパーもどこのお店も品切れになることはなかった。私たちは生活力があるので、自信があるのですよ。」と言われました。2か月間は買い物に行かなくても、すべてのものが家で、自分たちで自給自足で暮らせると。

日本では近年、「晴」の場と時間が極端に減少していると思います。例えばお正月とかお祭りとか、そういうものです。逆説的に言うと、毎日が「晴」でなければ気が済まなくなっている。毎日お正月のような、クリスマスのような生活でないと気が済まなくなっ

きている。豪華な食事をしたり、外食をしたり、買い物をしたり、テーマパークに行ったり、ゲームをしたり、そういう娯楽性の強いものとか、人はより強い刺激を求めて、それが尽きることはなくなっているわけです。そういう中で、「晴」がなくなっている。

「晴」が存在するのは、「褻」があるからこそで、「褻」というのは日常の営みですけれども、毎日が「晴」になってしまえば、「晴」は「晴」でなくなってしまうわけです。言い換えれば、「褻」が「晴」に取って代わってしまったという言い方もできると思います。こういった今の日本の暮らしの変貌というのは、日々の生活、営みをおろそかにして、日本人の思考や価値観そのものに今後も大きく影響を与えていくのではないかと心配しています。

また、利己的な主張が近年著しいと思います。震災の後の瓦れきの処理さえ全く進んでいない状況は象徴的な事例だと思います。国民一人ひとりが、私と公はコインの裏表でワンセットであるという視点を併せ持つべきであると思います。そういう認識に欠けているのではないかと思います。

目的と手段の取り違いがどの分野にも多くあるように思います。例えば清潔の本来の目的は、健康の保全と増進であつたはずで、清潔は健康のための手段であつたはずなのに、清潔ということが目的化することによって、抗菌グッズがどんどんあふれていって、その結果、私たちの免疫力が低下している。健康ではなくなっているという結果を招いて、本末転倒になっている。こういうことが、色々な分野で行っているような気がします。

高齢者の話がたびたび出ています。先ほどのお話にもありましたけれども、世間で議論されている高齢者、逆三角形の話になると、高齢者イコール扶養対象者であり、経済的価値を生まない者として語られている。そういう視点でしか語られていない議論がとても多いような気がします。しかし、高齢者というのは、まさに叡智の蓄積のある人が多いわけです。高齢者の経験や知識の共有化、活用がなされなければ、私はその叡智の引き継ぎと蓄積がなくなってしまうと思っています。

本来の日本人が持っている叡智について、少し考えてみました。先ほども言いましたけれども、叡智すなわち文化力を創出する基礎となっているのは、日々の営みにあると思います。その日々の営みというのをもう一度、その原点に返って、大事にしなければいけないのではないかと思います。

日本人は古来、自然とともにあって、その自然観が日本人の哲学や価値観、芸術文化を育んできました。これらは日本固有というよりは、むしろ今、世界が共有する方向に動き始めているような気がします。今、世界が希求しているものが日本にあるのだという自信をもう一度、私たちは持って、国際社会に大いに発信していくときが来ているのではないかと思います。そして、その日々の営みとか、その背後にある自然の持つ重要さを考えた場合に、世界においては日本、国内においては各地方がそれぞれに持つ特性や能力、美德等を再認識して、自覚することが重要であると思います。

これも先ほどから、色々な委員の方がおっしゃっていますけれども、グローバル化が進

むほど、今後ますますローカルというのが重要になっていくと思います。例えばエルメスが打ち出しているようなグローバル・マルチ・ローカルのような発想です。より便利に、より早く、より快適にといった利便性とか快適さを私たちはずっと追求し続けてきました。その結果、世の中には物があふれている。過剰なサービスとか包装、ラッピングとかアナウンスとか、そういうものに日本人は慣れ過ぎていて、気が付いたら日本は世界で一番快適で過保護な国になっていたような気がします。つまり足し算に邁進してきたのが現代日本ではないでしょうか。

しかし、本来、日本の伝統文化の多くは、引き算の美学の上に成立しています。言わないこと、省略すること、こういうことによって生まれる余白。その余白は何もないのではないのです。言わないことによって生まれる余白の豊穡を日本人が忘れかけているように思います。物欲は次の物欲を生むだけで、決して充足感を与えてくれません。足し算が私たちにもたらしたものを一度ここで整理をする必要があると思います。

日本文化の特徴は言葉で説明しにくいところにあります。そこが最大の魅力であり、最大の難点でもあります。例えば日本画とか日本料理とか、茶道、華道、書、俳句もそうですけれども、そういうものに共通するのは型です。この型と省略によって生まれる余白も共通してあります。それから、どの分野でも四季、季節感を非常に重んじています。

そうした余白、要するに言葉の周辺にあるもの。あるいは実態の背後にあるもの、見えないもの。そういったものを重んじたり、あるいは自然・季節感を重んじたりする日本人の価値観や美意識というのは、芸術文化だけではなくて、衣食住の暮らしにも根づいています。それらを的確に今後、説明していく必要があるのではないかと思います。今までこれを余り説明してこなかったのではないかという気がしています。

日本人のあいまい性とかディベート下手というのは、西洋的な価値観の中では一方的に負のものとして受け取られていますけれども、私は日本人のあいまい性には、もっと奥深い背景があると思います。ある意味で成熟の証しでもあると私は思っています。かつてロラン・バルトというフランスの思想家が言ったように、逆に日本人と比較して、西洋人は言語に見切りを付けることを不得手とする。多くを語り尽くさないということも、そういうことだと思います。そういった日本文化の本質が、私たち自身が知らずに、それを劣等感として今まで持ち続けてきているというのが現状ではないかとも思います。

ポール・クローデル、小泉八雲、アンドレ・マルローといった外国人が実際に日本に来て滞在して、日本人に接して、その文化と民度の高さに大変驚嘆していますけれども、そういった知日派が日本を称賛するのは当然といえば当然ですが、それ以外のピカソ、ゴッホ、マラルメ、リルケ、ストラヴィンスキーとか、色々な分野の世界的な第一級の芸術家たちが日本文化をこれまで讃えてきています。そういったことも私たちは知るべきだと思います。

そして、日本が国際社会に参加して、大きな役割を果たしていく中で、自分たちの国の特性を再認識して、それをきちんと説明していくことが重要だと思います。そのためには、

もっと外国語を習得しましょうという話が色々な方から出ていますけれども、それと同時に、質の高い通訳、翻訳家の涵養というのも求められます。更には、その言葉を的確に訳すというだけではなくて、言葉の背後にある自国の文化や歴史というものの造詣を深めること。文化の翻訳までできる翻訳家、通訳の育成が必要になってくると思います。さらに、マスコミの質の向上も求められます。

最後に、私が今後必要だと思っていることを幾つか述べさせていただきます。先ほども言いましたけれども、1つは、一度ここで基本に戻って、日々の私たちの暮らしの中で、再び型というものを学び直したらどうかと思います。そして、個人個人が礼節、規範、美意識などを身に着けることが肝要です。ひいては、それらの総体が国の規範、国の美德、国の力になると私は思っています。そして、日本の文化の特質を積極的に海外に発信する。先ほど言いましたように、それらは説明しにくいものが多いのですが、外国人にわかりやすい論理を使いながら、日本の持つ潜在力を発信していきたいと思っています。

具体的な提案がいくつかあります。1つは海外における日本文化発信施設の開設です。フランス、ドイツが今、日本の京都に設けているアーティスト・イン・レジデンスのような発信基地を海外に設置することで、新進作家の創作活動の支援にもなりますし、同時に日本文化を発信することになります。そして、そこに滞在することで創作者同士の交流も生まれて、各分野が連携することで新たな展開も生まれるのではないかと期待します。

国内ですけれども、今、地方で存続の危機にある手仕事、伝統行事、言葉、習慣、古い家屋などがありますが、そういうものの掘り起しと保護、後継者の育成の支援をする制度をもっと整備していった方がいいのではないかと思います。地方の伝統工芸の職人や技術の継承のために、今の経済活動にいかされるよう技術と需要をつなげる橋渡しが必要ではないのかと思います。特に東北地方では、もともと後継者や需要が不足で危機的状態にあったところに震災の一撃があって、ものづくりが危機に瀕しています。雄勝のスレートなどもそうですけれども、そういうものが幾つもある。

芸術文化というのは複合的に成立しているものが多い。ですから、一つの分野が消滅してしまうと、全体の存続あるいは質の低下に関わってきます。例えばこれはつい最近聞いた話ですけれども、お能の能楽師の足袋をつくる足袋職人がついに数か月前にいなくなりました。では、能の方たちはどうしているかというと、足袋を歌舞伎の足袋をつくる人に発注し始めたのだそうです。何が違うかといいますと、能の舞台と歌舞伎の舞台では明らかに大きさが違うわけなので、やはり能には能の足袋をつくる、より精密な技術が必要なのだそうです。一つの例として挙げられると思います。

あるいは私の知り合いの左官職人がいるのですが、どんなに彼が天然素材にこだわって、古い伝統のやり方で左官の仕事をしていても、家は左官だけではつくれないので、大工さんやほかの分野がどんどん細っていくと、左官だけが頑張っても成立しなくなっていくのです。

さらには政治や経済のリーダーたちに文化についてもっと考えていただきたいと思い

ます。私が言う文化というのは、絵画、歌舞伎、オペラとか、そういう芸術だけではなくて、もっとその基層にある文化です。

繁栄、幸福、平和、叡智この、PHP+1W がどれも定義づけがとても難しいものだと思います。多分一人ひとりにとって、定義にずれがあると思います。これは国民全体の間で、その定義が共有化されていないといけないのではないかと思います。

前回の部会でも経済的な繁栄ということに関する発言が多く、それを目指すことが主要な目的の一つであるというような印象を私は受けたのですが、先ほど言いましたように、経済的な繁栄というのは、幸福や平和のための手段であり、目的ではないとする考えも、私の周辺には多くあります。日本に限らず、海外においても、そういう考え方もある。今後、この部会や分科会全体の議論を考えていく上で、このようなことを考慮して進める必要があるのではないかと考えております。

大変雑駁でしたけれども、以上です。

○荻部部会長 どうもありがとうございます。

○荻部部会長 では、今日の御報告に据えて、御自由に議論をしていきたいと思います。一応2時ということになっていますけれども、部屋はその後使えるそうですので、もしも興が乗れば、その後、ある程度延長してもいいですし、そのときの具合で見はからいます。

今、事務局の方からお話がありまして、先ほどお話しが出た議事録の件ですが、実はこれまでは方針としてはホームページに載せる際に、議事要旨を載せるのですが、まず最初は各委員の名前は伏せて公開して、すべての部会、分科会が終了した後、もう一回名前を付けた形で公開するという方針であると前回お伝えしましたが、その後者の名前を公開するかどうかもしばらく当面は見合わせるというように平和の部会の方ではしたようです。

確かに考えてみれば、公開することによって不利益が生じる発言ということもあり得ますし、それをいちいち考えていると自由な議論ができないので、この部会も平和の部会に合わせて、しばらくは名前の公開はしない。どの人が委員かというのは公開されていますが、この発言をだれがしゃべったかということは、少なくとも当面の間は控えるということにしたいと思います。

○金森委員 自分の場合は明らかにわかってしまうと思いますが。

○荻部部会長 それはもしかしたら私からかもしれないし、疑いがあったら私の発言にするということにします。

では、いかがですか。

○鈴木委員 非常に参考になるお話をありがとうございました。何回かグローバル化とローカル化みたいな議論があったかと思いますが、やはりグローバル化の中でローカル化というのは非常に重要だと思います。例えばアメリカの高等教育を見たときに、アメリカの大学がグローバル化を進めるといったときに、ほかのヨーロッパや日本の大学の真似をするかといったらそうではなくて、世界の中で自分はどのような位置にあるかを踏まえ

た上で戦略を立てていくということがグローバル化だと思います。日本全体であっても地域であっても、自分たちのところだけを見るのではなくて、その他、周りも見つつ、総体的な中で自分の強みを伸ばしていくのがグローバル化ということの一つの視点なのではないかと思いました。

もう一点、今日は野田総理から、超高齢化社会の中でどうやって日本が叡智を回していくかという問題提起がありました。日本の特徴として、職業に貴賤がないというのがあると思います。アメリカは、勉強しないとマクドナルドの定員にしかねないというようなことが平気で先生から言われるような社会であると思いますが、日本ではそういうことはない。そういう中で高齢者の方であっても、色々な方がさまざまな職業について、それぞれをすべて尊重するような社会をつくれるような素養が日本にはあるのではないかと思います。雑駁な意見です。

○荻部部会長 今の御意見で関連して思い出したのですけれども、荒川区の幸福に関する委員会に参加されている委員がいたと思います。さっき幸福というのは何なのかというお話がありましたが、これは定義をするのは難しいけれども、ある程度、何かこんな感じかなというのが共通理解から出てくる方向があるといいなという気がします。

それと今、おっしゃったような高齢化社会で、高齢者がどうやって生活していくのがそれこそ幸福なスタイルなのかみたいな議論は、少なくとも荒川区という地域ではどういうふうにされているわけですか。

○坂田委員 簡単に申し上げますと、荒川区でやっていますのは、荒川区にとってのハピネスとは何だろうかということです。OECDとか内閣府もやられていますけれども、実は幸福の定義はコミュニティによっても差があるだろうと。共通の部分もありますけれども、地域の実感に合わせた幸福仕様をつくろうということをやっています。その中には、経済というのは大きな要素としてありまして、それ以外に教育、文化、あとは結構関心として高いのは、安全なのか安心なのか。子育て、高齢者に対するサポート。そういったものが全体の中には入ってきています。

今おっしゃったような意味では、幸福というのは世代によっても違いがあるだろうし、私はよく言うのですが、子どもの幸福というのは、親が考えることと子どもが感じることも違うというので、非常に多義的で難しいところではあります。しかし、そういうものの全体としての総和と、それぞれの層から見てどう見えるかというものの両方を追求してみようというようなことでやっています。繰り返しになりますが、最近非常に目立つのは、安全とか安心という問題に対する関心の高さが非常に目立つように思います。

○荻部部会長 今のセキュリティの問題は、先ほどの御報告にも少しありました。私はセキュリティの問題は、実は今、日本社会の普通の人が抱えている問題として、それこそ大震災のこともあるし、実際には増えていないと思いますけれども、犯罪が増えていると言われているので、その話が文化や知の話にどういうふうにつながってくるのかというのが実は私も前から考えていて、はっきりしないところがあって、そこはどうですか。

○隠岐部会長代理 個人的な観点からは、実は私自身はセキュリティの問題はやや関心が薄いといえますが、あのときにエデュケーション・セキュリティと言ったのは、主に中等教育くらいまでを正直念頭に置いていました。高等教育に関しても労働市場という意味でセキュリティというのを考えたのですが、一方であまり安心・安全の方にみんなが凝り固まってほしくないという気持ちも勿論あります。

特に安心・安全で不安なのは、外敵を排除するみたいな発想と結び付きやすいので、標語として掲げることには、個人の言語感覚としては、やや抵抗感があります。安心・安全を2050年のために掲げるというよりは、その意味をくみ取りながら、何か別の表現があったらいいのではないかと私は思っています。つまり、冒険心とある種の幸福のために必要な条件を保障するというような感覚とをつなげられるような表現が欲しいなと思ったりします。

○坂田委員 一言だけ。荒川区でやっているのは、冒険心とか、そういうこととは関係がない安全・安心でして、その背景にあるのは、荒川区は実は犯罪率が非常に低いのです。先ほどどなたかからありましたけれども、それはコミュニティが残っていて、コミュニティの中には一種の美德とか、相互に思いやる心などがあり、お互いにある種見合っているのです、何か問題があれば、お互いにサポートをしてあげる。だから、高いのです。

そういうものの上で成り立っているのですが、最近起こっていることは、それが徐々に低下してきているということとして、それをどうやって社会として支える手法を考えるか。例えば高齢者に対しては、抱っこ隊を荒川区は組織してまして、いざというときに抱っこして降る。この間の震災のときに実際に行われたのですけれども、抱っこして階の上から降る。マンションの高いところに高齢者が住んでおられることを禁止はできないので、抱っこ隊があります。

最近やっているのは、防火の問題が非常に大きい。荒川区は犯罪率は低いのですが、火が出そうなところが多いというのが特徴で、そういうところにお金をつぎ込んで、それをきれいにすることは、すぐにはできない。したがって、バケツを適正に配置するということを今やっています、非常にローテクですが、バケツを適正に配置して、それを自治会とか協力してくれる人たちとかで、まずは火を消す。どう配置するかというのは実は非常に難しい話で、これを学問しておられる方もいるのです。そういった方に来ていただいて、どう配置するかというのを今やっています。もし、そういうのができれば、それはほかの自治体や、場合によっては海外でも活用可能な話ではないかと思っています。

○荻部部会長 ほかにいかがですか。

○高木委員 示唆に富むお話をたくさんいただきまして、ありがとうございました。

先ほどグローバル化の話が出たので、今日お聞きしながら思っていたことを一言申し上げたいのですが、グローバル化が是か非かということを議論してもしようがないのかなと思っています。日本はもう既にグローバル化していますし、その前提でどうするのか。ローカリティをどうやって生かすのか。それを日本人の幸福なり繁栄なり、あとはアジアや

世界に日本の知を共有していくことにつなげるかということを考える必要があって、グローバル化自体を不安視するようなことをしている時期ではないかと思っています。

そのときにグローバルかローカルか、アジアか西洋かみたいな二元的な価値観よりは、先ほどおっしゃられたような、多元的な価値観をどう入れるかということが必要だと思いますし、バックキャストという考え方がもしかしたら、実はその次のものがあるのかなと今日思ったのですが、未来は一つではないということを去年、日本人とても認識したのだと思いますし、色々なことがそれこそ、どこかで想定外と想定内を引いてしまうと、それ以外は全部想定外になってしまう。ただ、未来は複数あるという考え方をしていけば、色々なオプションが持てるのだと思うので、そういう形での議論を今後できたらいいなと思いました。

例えば先ほどお話しの出た社会実験ということであれば、どういう社会実験をしたらいいのかというような具体的なアイデアが、この分科会が終わるときに出ていけば、政府として実現していくこともできると思いますし、そういう方向で議論ができればいいなと思って聞いておりました。

○荻部部会長 ほかにいかがですか。

○金森委員 今お話があった社会実験みたいなものは、私が携わる舞台芸術文化で言えば、どういった身体表現が未来を創造し得る、新しい表現なのかを実験するための土壌が日本にはなさ過ぎます。

要するに、劇場と呼ばれるものが私にとっては実験の場であって、専門的实验には専門家がなくて、新潟であれば新潟、広島であれば広島といったような、地域の特性を生かした実験が行われることによって、それこそ多元的な日本文化の底上げが図れると考えているのです。しかし今、実際に劇場の中に専門家を抱えて活動しているのは、新潟と静岡ぐらいですから、日本の多くの劇場は、実験的創造の場としてではなく、すでにあるものを上演する単なる箱と化しているのです。

○荻部部会長 そうですね。つまり地域の制度の多様性みたいなものをこれから意識的につくらなければいけない。日本の中だって多様だし、グローバリゼーションと言っても、単にマクドナルドやスターバックスだけではないだろうという面はあると思います。その辺をどういうふうに文化の多様性みたいなことを、我々が自覚しながらやっていくかということが大事だと思います。最初のごあいさつで多様性ということをおっしゃっていましたが、もう少し敷衍されると、どういうことですか。

○隠岐部会長代理 かなり素朴な感覚で使ってしまったのですが、先ほど想定外が生じるとお話にありましたが、想定外というものが非常に減っているというか、想定外を喜べる感覚があるような状況を考えました。

多様という意味では、日本自体が成り立ちも多様ですし、例えば小笠原諸島には西洋由来の人たちで、300～400年くらい前から移り住んだ人が子孫を残して、今、欧米系日本人がいるということですね。日本の中を見るだけでもすごく色々な出自や民族や文化がある

のですが、それを忘れる方向に教育なども行っているような気がするし、それは日本が近代化する中で、中央集権化して必要だったときもあったのかもしれませんが、今はその辺を見直していく時期かなと。このように歴史系的な視点で言っているのと、あとはライフスタイルの多様性を非常に考えていて、今までの日本だと福祉の領域を核家族が担うというようなモデルでやってきたわけですが、将来、単身者も増えるかもしれないし、婚姻制度によらない子どもが増えるかもしれないし、先ほどは同性愛という話もしましたが、カップルの形も多様化していいのではないかと、これをすごく自分の身近な中で感じているので、とにかく今のところはそのくらいです。私の想定しない多様性がひょっとしたらあるかもしれませんが、そんな感じです。

少し雑駁な意見になりましたけれども、以上です。

○荻部部会長　そろそろ予定の時間が来たのですが、もうお一方、どうしても今日ここで御発言されたい方。勿論、次回発言してくださっても構いませんし、もしもここでというのがあれば、是非伺いたいと思いますけれども、いかがでしょうか。

○坂田委員　今の補足で、想定外をなくすということですが、今のお話に続けますと、多様化するものを裏打ちする制度の創造が必要だということです。例えば結婚しないカップルは、戸籍上はどうなるのか。従来は想定していないので、そういうカップルからすると、非常に不自由なわけです。多様性を認めるという背景の一つには、精神論だけではなくて、そういう制度が必要だと思います。

科学技術の力を生かす意味では、色々な意味でそういう制度が必要で、特に新しい技術を利用しますと、何らかの危険性は伴いますと、危険性の全くない技術はあまりなくて、それを社会として、どこまでだったら認めるのか。どういうプロセスだったら認めるのか。そういうのを基準や制度として作り込まないと、企業の方も個人の方もリスクが高過ぎてできない。したがって、知が閉塞されるという意味です。多様性の広がりがあるからこそ、想定外にしろ、制度基盤もあちこちで必要になっていると私は感じています。

○荻部部会長　どうぞ。

○黛委員　私の説明の仕方がうまくなかったのかもしれませんが、私はグローバル化が負だとは言っていないです。グローバル化はやはり進んでいくだろうと思います。だからこそ、それがもたらす負の部分のここですっかり見据えていかないといけないのではないかと。そしてローカルが大事ではないかという意味です。

先ほど「までい」の言葉を出していただきましたが、「までい」はゆったりとという意味はないのです。「までい」は結構忙しいのです。真手で丁寧にやるので、実は「までい」をやるのはとても大変で、今はやりのスローライフとはちょっと違うものです。キャッチコピーが必要ということでしたけれども、「までい」はどうでしょう。地方の方言ですけども、私は来週、ニューヨークへ行って、震災を通して見た日本文化の話をするのですが、むしろ今、世界が福島を見ているわけですから、「までい」という言葉をキャッチコピーにして、外に出していくくらいの大胆なことをしてもいいのではないかと思います。

○荏部部会長　ありがとうございます。私も都会に住んでいる人間の偏見から、自由でないということがよくわかりました。

ほかにいかがですか。なければ、今日はこれでお開きにしようと思います。次回は3月5日月曜日の午後3時からです。その後の詳細については、事務局から連絡がありますので、よろしくお願いします。

本日はどうも御出席ありがとうございました。